新井下遺跡

ー市道舗装復旧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

２０１４.３

茅野市教育委員会

序　文

八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰高原に抱かれた長野県南東部にある茅野市は、豊かな自然に育まれた、日本列島でも稀な縄文文化の華開いた地域です。市内には特別史跡尖石石器時代遺跡、史跡上之段石器時代遺跡・駒形遺跡や、棚畑遺跡出土の国宝土偶（縄文のビーナス）、中ッ原遺跡出土の重文土偶（仮面の女神）などの日本の縄文文化を代表する文化財が数多く残され、「縄文の里」として全国にその名を知られています。一方、そうした「縄文」にかくれた感のある弥生時代以降の遺構や遺物も、近年の市街地周辺における調査でその数を増し、縄文時代に続く地域の歴史が明らかにされ始めています。

本遺跡は八ヶ岳西麓の北側を占める湖東地区に所在します。古くから土器や黒曜石が拾えることで、北に位置する中ッ原遺跡とともにその存在が知られていました。

昭和33年の北部中学校の建設工事によって、遺跡は消滅したと考えられていましたが、平成23年まで6次にわたる調査等によって、外縁部にはかなり良い状態で遺構が残ることが確認されました。また、発見された遺構の数とその内容から、湖東地区のみならず、茅野市を代表する縄文時代と平安時代の集落遺跡であることが明らかとなりました。

この度、市道の舗装復旧工事に伴い、遺跡の南側外縁部で発掘調査を行いました。その結果、縄文時代中期の竪穴住居址と縄文時代の貯蔵穴と考えられる穴が発見されました。いずれも遺構の一部を調査したに過ぎませんが、縄文集落の南側への広がりを知る上で重要な発見となりました。

こうした調査成果をまとめたものが本発掘調査報告書です。本書が多くの方に利用され、地域文化向上の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施にあたりましては、工事関係者の皆さまから遺跡の保護に対するご理解とご協力を賜り、円滑に作業を進めることができました。心からお礼申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆さまに感謝申し上げます。

平成26年3月

茅野市教育委員会
教育長　牛山　英彦

例　言

1 本書は平成25年度に実施した市道舗装復旧工事に伴う長野県茅野市湖東新井所在の新井下遺跡発掘調査報告書である。
2 発掘調査は茅野市長柳平千代一の委託を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3 発掘調査は以下の期間に実施した。
　本調査　平成25年9月19日
　整理作業および報告書作成　平成26年1年20日～3月10日
4 発掘調査における委託業務は以下の業者に委託した。
　基準点測量　株式会社両角測量
5 発掘調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管されている。
6 発掘調査は茅野市教育委員会事務局文化財課が実施した。組織は下記のとおりである。
　① 調査主体者　牛山英彦（教育長）
　② 事　務　局　小池沖磨（生涯学習部長）
　③ 文化財課　鵜飼幸雄（文化財課長兼尖石縄文考古館長）　中村浩明（考古館係長）
　　小林深志（文化財係長）　功刀司　山科哲　塩澤恭輔　守矢美空　小池岳史
　④ 調査担当　小池岳史（発掘調査・整理作業・報告書担当）
　⑤ 発掘調査・整理作業参加者
　　補　助　員　牛山矩子　酒井みさを　大勝弘子　武居八千代　立岩貴江子
　　作　業　員　宮坂功　　柳沢省一

凡　例

1 本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。
2 挿図における遺構の略号は以下のとおりである。
　①2号住居址→2住　②72号土坑→72土　など
3 本書における土層の色調は『標準土色帳』を参照した。

第１章　調査の経緯と経過

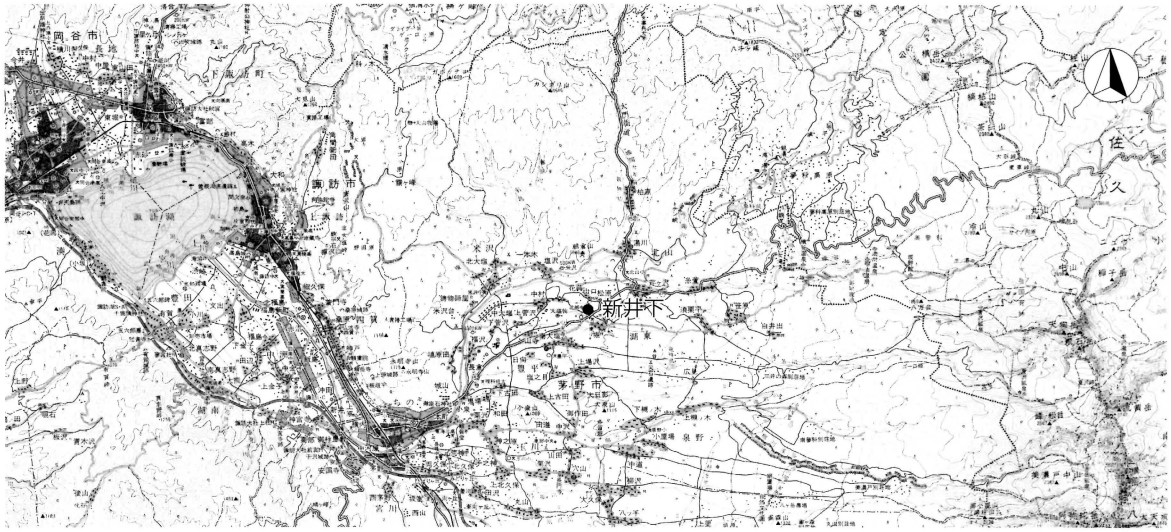
新井下遺跡南端にある市道の舗装復旧工事が行われることとなり、平成 25 年 8 月に茅野市水道課から文化財保護法第 94 条第 1 項「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書」が提出された。

この市道の北に接し中村配水池が建設されているが、平成 24 年にこの場所に移転新設された。これに先立ち行われた平成 23 年の市教育委員会による確認調査の結果、縄文時代中期前半ならびに後半と平安時代の竪穴住居址、縄文時代と考えられる貯蔵穴や柱穴などが発見され、同年に記録保存による本調査を実施した。

縄文時代の遺構は、配水池建設範囲の南半からまとまって発見されたが、この中に通知された市道にかかる竪穴住居址（2 号住居址）が存在した。工事計画によれば、施工上必要となる掘削は舗装面下約 30㎝である。その深さから考えて、市道にかかるこの竪穴住居址に影響はないと思われた。そこで市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうこととした。

9 月 18 日に工事が始まる。計画深度まで慎重に掘削を進めたところ、施工範囲東側に明黄褐色土層（ローム層）が露出し、この面に 2 号住居址の埋土ならびに床面の一部を確認した。さらに、その数m北西に竪穴住居址（4 号住居址）の周溝と、これに重複する土坑（72 号土坑）を確認した。これらの遺構は、路盤の砕石下に保存されることとなったが、遺構の検出状態ならびに遺存状態を記録に残す必要があるため、急きょ発掘調査を行うことにした。

発掘調査は翌 19 日に行った。遺構の全容が把握されていたために、遺構に関わる諸記録の作成は短時間で終了した。その後、遺構検出地点から北側の調査を行った。原地形が北および西に向かう斜面であり、土層がよい状態で残されていた。黒色土層の一部に縄文時代中期土器の包含を認めたが、調査上の制約から遺構の埋土であるのか否かは明らかにできなかった。同日に調査が終了した。



第 1 図　遺跡位置図（1/200,000）

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第 1 節　遺跡の地理的環境

新井下遺跡は茅野駅から北東に約 7㎞、八ヶ岳西麓の湖東地区新井に所在する。新井集落のある台地と地続きで、この集落の西端に位置することから「新井下」の遺跡名で呼ばれている。本遺跡は東西に長い台地上に立地し、茅野市立北部中学校を西限、国道 152・299 号付近を東限とする東西約 400 m、台地の幅が約 200 mとなる平坦部一帯が遺跡に登録されている。遺跡の面積は約 50,000㎡、遺跡内の標高は 970 ～ 985 mを測る。

台地の南側斜面は、芋倉川の谷へ向う緩やかな斜面で、田や畑に利用されている。一方、北側斜面は汐の浸食や凍み上がりによる崩落によって、10数mの切り立つ崖となる。台地の裾を流れる両小河川は年間を通じて水量が安定しており、アマゴの泳ぐ姿を見ることもできる。かつて、台地の北側斜面に直交する小さな谷の根元から清水がこんこんと湧き出し、灌漑用水の一部に使われていたと聞く。適当な広さの平坦部と水量豊富な生活用水を備えたこの台地は、縄文時代や平安時代の人々が生活を営む上で恰好の場所であった。

新井下遺跡から半径1kmの範囲に、縄文時代を主体とする遺跡が多数知られている。北に山口、中ッ原、花蒔、東に松原、南に城、水尻、珍部坂A、珍部坂B、西に辻屋の大小の遺跡が所在する。

新井下遺跡主要発掘調査等一覧

調査年	地点	調査原因	調査期間	調査面積	主な遺構	調査成果・所見
昭和33年 (1958年)	台地北側 平坦面	中学校 建設工事	8月～9月			ブルトーザーによる造成の際に、土器・石器が多数出土。器形復元された縄文時代中期土器ほか蜜柑箱3箱分の土器片や石器を得る。工事中のことであり、十分な調査ができなかったが、遺物の量と立地する地形から縄文時代中期後半の大きな集落遺跡であると考えられる。
平成5年 (1993年)	台地北側 平坦面	保育園 建設工事	4月5日～ 7月23日	4,000㎡	縄文時代 前期前半住居址1 中期初頭住居址1 中期後半住居址21以上 後期前半住居址4 土坑多数 平安時代 住居址5（10C後半～11C初頭） 墓坑2	縄文時代 前期前半から後期前半まで断続的に営まれた集落遺跡で、中期後半が主体となることが確認される。中期後半集落は、台地の北側平坦面に環状ないし馬蹄形集落を形成したとみられ、調査地点は該期集落の東側と考えられる。 平安時代 中頃の集落遺跡であることが確認される。集落内から発見されることの稀な墓坑と、ここから出土した完形に近い灰釉陶器長頸壺などから、この地域の有力者が住まった集落であることが示唆される。また、7.2×5.2mと推測される大形の竪穴住居址（35号住居址）は八ヶ岳西麓において最大級である。
平成5年 (1993年)	台地 南側斜面	市道 改良工事	11月8日～ 12月6日	400㎡	縄文時代 中期住居址3（中葉あり） 平安時代 住居址1（10C後半～11C初頭） 掘立柱建物址1 柱穴列1 時期不明 溝状遺構1 土坑75	縄文時代 新たに中期前半（中葉）の竪穴住居址が発見され、より継続性の高い集落遺跡であることが確認される。 平安時代 集落が遺跡の南半に及ぶことが確認される。掘立柱建物址と柱穴列は竪穴住居址と軸方向が一致する。
平成6･7年 (1994･1995年)	台地北側 平坦面～ 北側斜面	中学校 改築工事	試掘調査 平成6年 7月28日～ 8月18日 本調査 平成7年 7月3日～ 9月1日	698㎡ 841㎡	縄文時代 中期後半住居址7 後期初頭～前半住居址1 後期前半住居址2 土坑 平安時代 住居址1（10C後半～11C初頭）	昭和33年の工事で敷地下の遺跡は失われたとされていたが、試掘調査の結果、台地の北側縁辺部に縄文時代の竪穴住居址と遺物包含層が確認され、かなりの範囲に遺跡が残されていることが判明する。 縄文時代 環状ないし馬蹄形集落と考えられる中期後半集落の北西部が確認される。後期前半の竪穴住居址（集落）が北側台地の北半に偏在する可能性が指摘される。 平安時代 集落が広範に及ぶことが確認される。
平成6年または7年 (1994年または1995年)	台地南側 平坦面	国道 拡幅工事			縄文時代 住居址1	遺跡東端を東西に通じる国道152・299号の拡幅工事の際、その切通し断面に縄文時代の竪穴住居址とみられる落ち込みが露出する。市教育委員会職員が現地を確認する。
平成9年 (1997年)	台地北側 平坦面	工場 建設工事	5月28日	5㎡	縄文時代遺物包含層	縄文時代中期前半（藤内Ⅰ式）と中期後半（曽利Ⅳ式）土器を含む黒色土が確認される。
平成23年 (2011年)	台地南側 平坦面	配水池 建設工事	確認調査 8月1日～ 2日 本調査 8月23日～ 10月24日	235㎡ 927㎡	縄文時代 中期前半（井戸尻Ⅰ式期）住居址1 中期後半（曽利Ⅲ～Ⅳ式期）住居址1 土坑 平安時代 住居址1（10C後半～11C初頭） 近世以降 溝址1	縄文時代 遺跡範囲南限となる台地南側平坦面の頂部付近から、中期前半と中期後半の竪穴住居址が確認される。また、南側斜面を踏査したところ、縄文中期土器や石鏃の散布が確認される。こうした調査の結果に基づき、遺跡範囲を南側へ拡大する。 平安時代 南側への集落の広がりが確認される。 近世以降 台地北側平坦面との地形変換点付近から、近世以降に掘削された溝址（汐）が確認される。

第２節　遺跡の歴史的環境

『諏訪史』第一巻（1924）「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」に「新井下」の名が記されている。このように本遺跡は古くから知られた遺跡である。また、市内遺跡の中で早い時期に調査が行われた遺跡でもある。

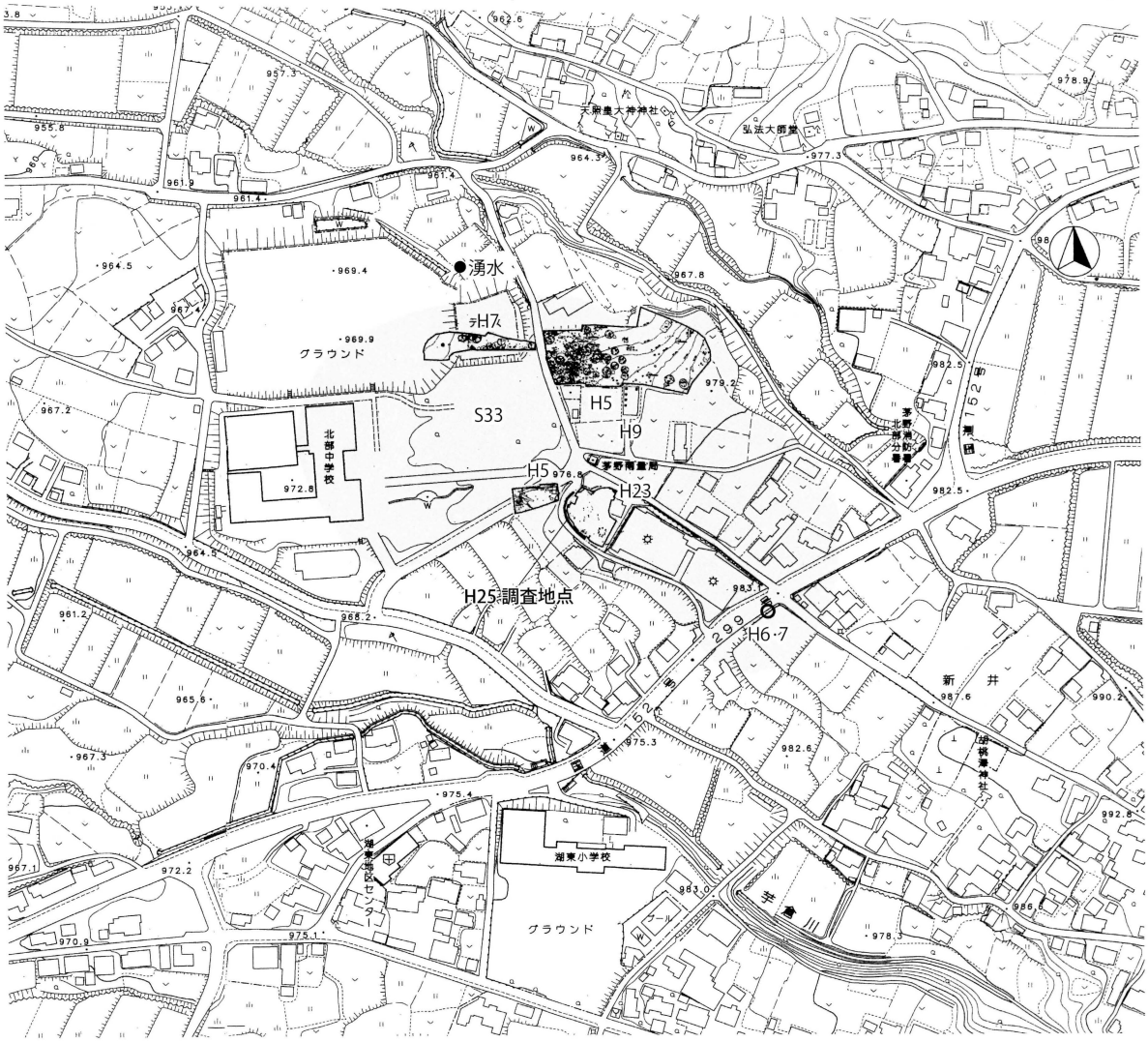
昭和 33 年の北部中学校建設工事に伴う調査以降、これまでに 7 次の発掘調査等が行われ、縄文時代と平安時代の拠点的な集落遺跡と確認された。また、中世の遺物や近世以降の溝址も発見されている。

当遺跡で行われた調査の概要は上記一覧のとおりである。以下、これまでの調査結果に基づいて、本遺跡の地理的・歴史的な特徴をまとめておく。

1　本遺跡のある台地の平坦部は、西から入る浅い小さな谷を境に、北部中学校や湖東保育園のある幅の広い北側平坦部と、中村配水池のある「馬の背」状の南側平坦部に区分される。

2　八ヶ岳西麓における縄文時代の拠点的な集落遺跡で、中期後半を中心に、前期前半から後期前半まで断続的に営まれている。中期後半の集落は、それぞれ北側平坦部と南側平坦部につくられるが、北側平坦部では環状ないし馬蹄形集落を形成するらしい。後期前半の竪穴住居址は、北側平坦面の北半に偏在する。

3　八ヶ岳西麓における平安時代の拠点的な集落で、時期が中頃（10 世紀後半から 11 世紀初頭）に限定される。竪穴住居・墓坑・掘立柱建物などから集落が構成される。



第２図　発掘調査位置図（1/5,000）

第３章　発掘された遺構と遺物

２号住居址　平成 23 年の発掘調査で発見され、曽利Ⅲ～Ⅳ式期とされた２号住居址の南西部を確認した。先の調査において、平面規模が直径にして約 6.5 ｍと推測されていたが、今回の調査によって、その数値が妥当であると確認された。また、西壁が弧状を呈し、隅丸五角形というより円形に近い平面形であることも確認された。市道建設時の掘削やアカマツの伐根に伴う撹乱によって、埋土の残りは極めて悪い。一部に明黄褐色土層に設けられた硬い床が露出した。埋土から遺物は出土しなかった。

４号住居址　工事による掘削で遺構の大半を失い、小穴が連なる周溝の下部、その内側に主柱穴とみられる直径約 40㎝と推測される穴（73 号土坑）が残るだけである。それでも、掘削断面に残る痕跡から、壁は急な角度で掘り込まれ、高さが 20㎝以上あること、周溝は幅が約 25㎝、深さが５～ 10㎝を測ること、床は明黄褐色土層中に平らに設けられていることなど、構造に関わる多くの情報が得られた。周溝から曽利Ⅳ式期とみられる土器片が出土した。僅かに１点の出土であるが、この時期の竪穴住居址と考えられる。

72 号住居址　４号住居址の北に重複し、これを掘り込みつくられた土坑である。掘削断面によると、直径が約 160㎝と推測される。埋土は２層に分けられ、壁際に暗褐色土、その内側に黒色土がレンズ状に堆積する。このような平面形・規模・埋土をもつ土坑が、平成 23 年度の調査区から３基（10・12・60 号土坑）発見されており、いずれも貯蔵穴の可能性が指摘されている。本遺構も同様の性格を考えたい。

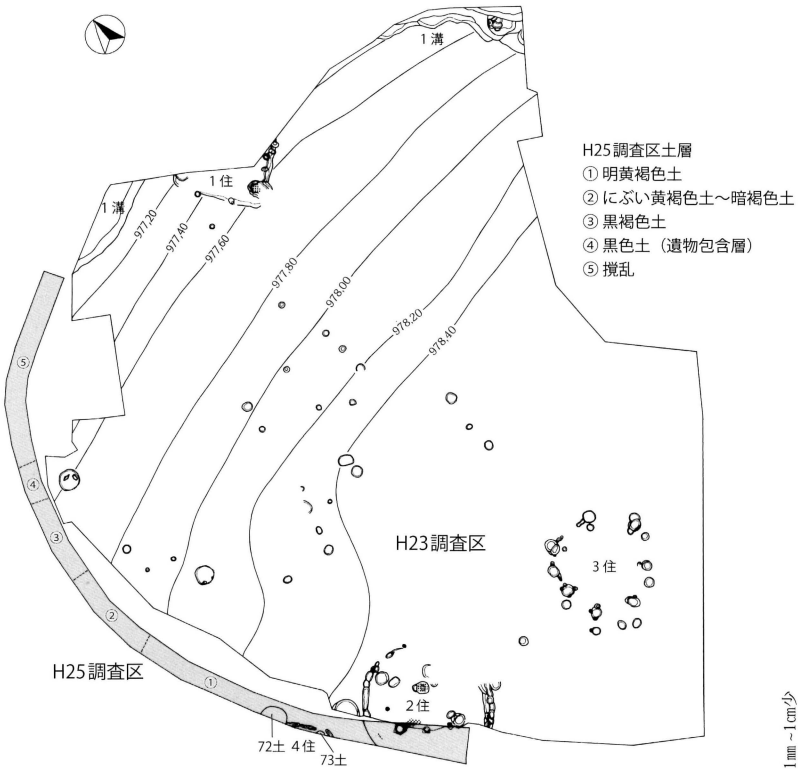
第４章　発掘調査の総括

調査地となった市道に接し中村配水池が建設されているが、かつてここには湖東保育園が建てられていた。園舎が建設されたのは昭和 37 年であるが、調査が行われた記録は残されていない。おそらく、昭和 33 年の北部中学校建設に伴う大規模な造成工事で、遺跡そのものが消滅したとみられていたことに加え、幅の狭い台地の南側平坦部まで遺跡は広がらないとする地形的な観点から、調査が行われなかったものと推測される。

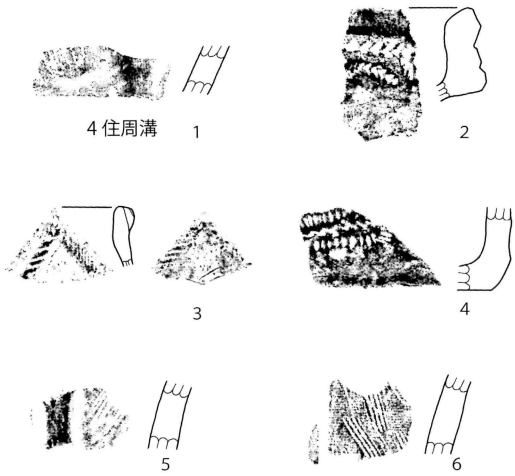
平成５年の市道改良に伴う発掘調査で、北側平坦部の南側縁辺から縄文時代中期前半の竪穴住居址が発見され、調査区のさらに南側に縄文集落の広がる可能性が指摘されていた。けれども、近年まで調査の機会に恵まれることがなく、遺跡南側の地下の様子とともに遺跡の南側限界もはっきりしない状態が続いていた。

平成 23 年に中村配水池建設工事に伴う発掘調査が行われ、これまで遺跡の南限とされた南側平坦部の頂部付近に縄文時代中期の竪穴住居址が複数確認された。さらに芋倉川へ向かう南側斜面に中期の土器片が散布するため、該期集落の広がる可能性が高いとみて、遺跡範囲を南側に拡大した。

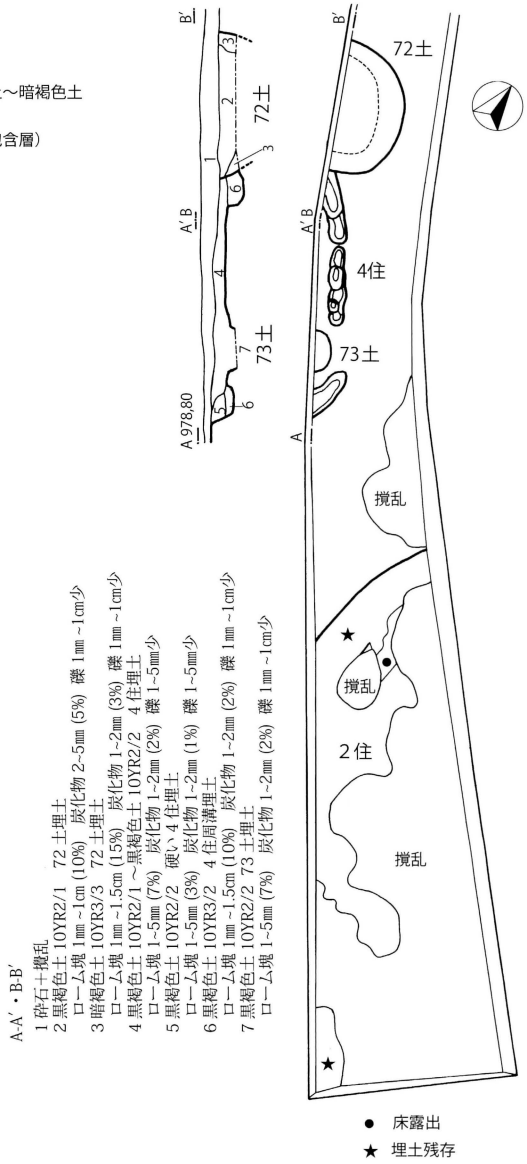
今回の調査は幅１～２ｍの狭い範囲を対象に実施したが、それにも関わらず、遺跡南側につくられた縄文集落や遺跡範囲の南側限界に関する情報を多数得ることができた。１つは、平成 23 年に調査された２号住居址の南側ならびに西側が確認され、本遺構の構造がいっそう明らかとなった点である。もう１つは、中期後半とみられる竪穴住居址（４号住居址）の新たな発見によって、先の調査結果に基づく南側への遺跡範囲拡大の妥当性が補強されるとともに、平坦部の頂部から南側斜面一帯に推測される中期後半集落の存在をより具体的に示せるようになった点である。しかしながら、先の報告書で提起されたように、南側平坦部につくられた中期後半集落が北側平坦部の該期集落を「母村」とする「分村」と考えることができるのかなどの両集落の関係については、調査結果から、これといえる解明の糸口は見出せなかった。両集落の関係解明は、今後の調査と研究に委ねることとしたい。



第３図　遺構全体図（1/400）



第４図　出土土器（1：4住、2～6：遺物包含層）（1/3）

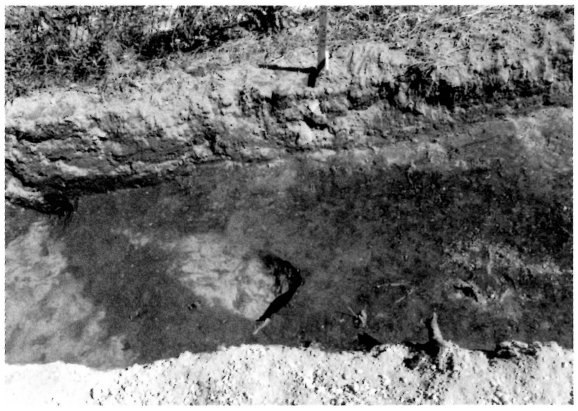


第５図　遺構平面図・土層断面図（1/80）

報告書抄録

ふりがな	あらいした						
書名	新井下遺跡						
副書名	市道舗装復旧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	小池岳史						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塚原二丁目６番１号　TEL 0266-72-2101						
発行年月日	西暦 2014 年３月 20 日						
所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新井下（あらいした）	茅野市湖東新井（ちのしこひがしあらい）	20214	59	36 度 01 分 30 秒	138 度 12 分 00 秒	20130919	50㎡	市道舗装復旧工事に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
新井下遺跡	集落跡	縄文時代		竪穴住居址２ 土坑２	縄文土器	遺跡の南限とされる芋倉川に面した南側斜面に、縄文集落の存在を示唆する新たな資料が得られた。		

(1) 2 号住居址検出状態（南東から）



(2) 2 号住居址検出状態（南西から）

(3) 4 号住居址、72・73 号土坑検出状態（東から）

(4) 72 号土坑検出状態（東から）

(5) 調査区中央の土層堆積状態（北から）

(6) 調査区北側の土層堆積状態（北西から）

(7) 作業風景（南東から）

新井下遺跡

－市道舗装復旧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 26 年 3 月 17 日　印刷
平成 26 年 3 月 20 日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　長野県茅野市塚原二丁目 6 番 1 号（0266）72 － 2101(代)
印刷　有限会社 アドウェーブ
　　長野県茅野市塚原二丁目 5 番 51 号